

書名 『曲がり木たち』	著者 小手毬るい 出版年 2016年 出版社 原書房
<p>岡山県（備前市）出身の作家・小手毬るいさんは、現在はアメリカ・ニューヨーク州にお住まいです。小説・エッセイ・詩など、幅広い作品の執筆活動を続けていらっしゃいます。</p> <p>2016年に出版された連作短編集『曲がり木たち』には、“生きづらさ（障がい）”を抱えた人物が登場します。単身アメリカに渡って活躍している車いすユーザーの女性の物語もあれば、おばあちゃんと2人で静かに暮らす言語障害の青年の物語もあり、生き方はさまざまです。そしてすべての物語に「大きな木と小さなベンチのある公園」が登場し、物語をゆるやかにつないでいます。</p> <p>おしまいの物語「木を抱きしめて生きる」に登場するおじいさんが、主人公である女子高生に「曲がった枝は、無理してまっすぐになる必要もない。あるがままで、いいのです」と語る場面が印象的でした。1人1人のかけがえのない人生を、温かく（時には厳しく）見つめて描かれた作品だと感じました。</p>	

書名 『昼間のパパは光ってる』	著者 羽賀翔一 出版年 2016年 出版社 コルク
<p>「世界は誰かの仕事でできている。」は、某缶コーヒーのCMキャッチコピーですが、この漫画はまさにそういうことを感じさせてくれる作品でした。昨年から今年にかけてヒットした『漫画 君たちはどう生きるか』を手掛けた漫画家・羽賀翔一さんが、ダム建設工事のために家族と離れて仕事をする男性にスポットを当て、描いたものです。</p> <p>ダム建設は必要だけれど、地元住民の生活を大きく変えてしまうことも分かっています。地元の自然環境を大きく変えてしまうことも。地元住民の理解を得たうえで工事をすすめ、すべてを丸く収める方法がないものか…悩んだ末に主人公・生沼（おいぬま）がとった行動とは？ 読むとちょっと元気になれる本です。</p>	